

民族のこころ (131)

砂漠に還る日

小田 淳一



リヤドから車で一時間ほど北へ走るとジャナドリーヤという町がある。そこでは年に一度「民俗芸能祭」(祭り自体もジャナドリーヤと呼ばれる)が二週間にわたって催される。広大な会場内にはサウジ・アラビアの各地方独特の様式で建てられた家屋がモデルハウスのように立ち並び、地方の特産物を集めたスークが開かれ、各地から集まった芸能集団が歌や踊りを披露する。公的機関も展示コーナーを設けており(コーナーというよりもむしろ建物であるが)、中にあるものをとりあえず覗いてみようという見学者たちが行列を作っている。ある建物ではサウジ・アラビアで電話が開通した頃のものらしい電話機が陳列され、見学者は古い電話機に触れては銘々の感想を述べるのである。教育省のコーナーでは先史時代からの歴史がパネルで展示され、敬虔な見学者が巡礼路の解説のところで立ち止まってメッカに思いを馳せる度に人の流れが停滞する。

休日のせいか会場はものすごい人出で、肩先をおつけ合いながら、またワイシャツにズボンというこちらの異様な服装ゆえか好奇の視線にさらされながら人込みの中を歩き回るうちに日は落ち、砂漠の真中に作られた会場は漆黒の闇と冷気に包まれ始める。会場の外には日用品を売るスーク、シャウルマヤケバブの屋台などがひしめき合い、日本製四輪駆動車が勢揃いした感のある駐車場まで人々はそぞろ歩いていく。

ジャナドリーヤが開かれる目的の一つは、サウジ・アラビア各地に住む「異なる」人々が帰属している「地方」をある意味で峻別して鮮明に浮き上がらせ、強烈な同属意識をポジティブな方向に昇華させることにあるのだろう。出身地方の剣舞を見ているうちに興奮したのか自分も群舞に加わろうとして警備の人間に取り押さえられた壮年の男性を間近で目撃したが、彼の眼にあったのは紛れもなく陶醉に似た昂揚だった。昇華の先にあるのが、「地方」の融和をこれほどまで可能にし「国家」を存立させている現王家に対する称揚であることは言うまでもない。そしてそれは自国の歴史を民に知らしめるという公的機関による啓蒙機能と微妙に重なり合っているのではあるが、そこにアラブ世界の他国との歴史的関連が意図的かどうかはともかくほとんど言及されていないことに注視せざるを得ないのである。

リヤドからジャナドリーヤに向かう幹線道路の両側に時々天幕やコテージ風の建物を見かけたのでインスペクターにあれば何に使うのか尋ねると、リヤド市民が週末に泊りがけで砂漠にピクニックに出かける時利用するものだと言われた。彼らは砂漠に広げた敷物の上で別段何をする訳でもなく、ただお茶を飲み、砂と戯れ、時には星々を眺めながら眠りにつくのだそうだ。要するに砂漠で砂に触れていると気持ちが落ち着くらしく、これは我々が量に対して感じるものと似ているだろう。

場所に思いを残さない資質に優れたサウジの人々は石油という僥倖が終わりを告げた時、従容として砂漠に戻り、昔の生活をまた始めるような気がする。そうでなければ、地方の融和に殊更拘泥し、自国の歴史に近隣国を関与させないという大掛かりな転義法はその効果を失ってしまうのだから。